

岡野八代

『ケアの倫理』

フェミニズムの政治思想

(岩波新書・2024年4月刊)



もともと「翻訳調」の文章に弱い私は、自分の読解力の衰えを痛感した。副題に「フェミニズムの政治思想」とあって、ケアも倫理もフェミニズムも政治思想も全く理解してこなかった自分に気づかされた。(さらに、この間に思いがけず、急性胆のう炎で二週間の緊急入院があつて、読解力もさらに低下中……)

これまでも、権威的な男性主導(中心)社会(家父長制)に単純に反発する気分は持っていたのだが、根本的な論旨の違いを感じた。かなり前から提示された課題なのに「新しい」用語・定義が必要なために「翻訳調・紹介風」にならざるを得なかったと解釈した。(もちろん理解し、素直に実践されている方も多く「釈

迦に説法」とならぬことを祈るのだが……)

論点の中心は、従来のギリシャ哲学以来カント哲学に至るこれまでの正義論・歴史観等が「自立した対等者の平等」を前提とした感覚や用語で貫かれ(フェミニズムの歴史、乳幼児から青年期までの育成期や、高齢者の介護などの保護・依存を必要とする者への「ケア」のことは、女性特有の「母性」や「家庭内の私事」として(又は、視野の狭さ・ヒステリーなど)と軽視されてきた……と指摘している。

トランプ大統領の出現以来、米国でも「中絶法」や「ジェンダー・マイノリティ」などの権利が復古化されているが、トランプの問題にしている意識は奴隸制承認の「南北戦争前」の南部側の家父長制的な考えと、功利主義で、一時代前の思想を踏襲しているように思われる。もちろんヨーロッパなどでも、移民の増加や不況などの生活不安で、国民世論が極右に向うことは危惧しなければならない。コロナ・パンデミック以来、ケア労働やヤングケアラーの存在など課題として噴出しているが、ジェンダー問題に繋がるフジテレビの不祥事なども、地位や低賃金の位置づけ等、何も解決していないように思える。出産・育児、生命維持のため

の気遣い・配慮・世話などの時間や手間が、これまで「労働」として考慮されて来なかった事実もいくつかは残存している。あちこちの職場に残る「セクハラ」「パワハラ」等も同根と考えざるを得ない。

歴史的制約としての「家父長制」「公私三元論」や、男らしさに裏付けられた「賃労働」に値しないこのことで「家族による妊娠・出産・保育・育児・介護・介助」などの分野は、確かに女性的・母性・家庭内の私事と（私自身のなかでも）矮小化し軽視してきたように思う。

以前『戦争は女の顔をしていない』（岩波現代文庫2016）の読了後、これまでの歴史は「男の言葉で語られてきた」のではないか…？戦場でも「お喋りをし、お洒落や化粧もする…」「郷里に帰還し差別・迫害を受ける…」女性たちを深く理解はしてこなかったように思う。NHKスペシャル「女性兵士 絶望の戦場」（2025年2月22日放映）などの視聴後、もう一步進んで考えられるのではないかと思った。

かなり以前、前所長の故八木先生が「マルクスも家事労働はかなり後まで残る問題…と言っていた…」ことが、今頃になって思い出される。労働の意味・価値

に新たな「ケア」の視点が加味されなければと思った。これまでも私的な体験では（性差と別に…）初めての飯豊山登山で「荷物の重さには弱いが、持久力はある」女性を実感し、退職前の富山の病院で消灯前からシーンとした男部屋で、消灯後まで賑やかな女性部屋の「騒音」を聴いて、最後まで「生き抜くのは女…」と実感した事を思い出した。それにしても、女性の給与や年金の格差は、これまでの社会の構造的欠陥の表出ではないか…？一方、先般のパリオリンピックの女子ボクシングで、「男女平等パンチ」が問題になった。男女差や思考の違いを黒川伊保子さんの「トリセツ」風な私の理解ではまだまだ不十分なのである。

私の理解では、黒川さんは狩猟で外に出る男性と採集・家事生活の女性の数千年の歴史を「違い」の要素として挙げていた様に思うが、（私にとって）男女差を取り上げた最初の出版物だった。

全生研メールで紹介されたハーマンの『心的外傷と回復』（みすず書房 全生研の子安さん紹介）では、戦場（ベトナム戦争等）帰還兵に、これまでの女性特有と考えられていたヒステリー症状や不眠・虐待・暴力性等が出現することは理解できたが、「回復」の方向

性までは明確に読み取れなかった。

その後、NHK「100分でフェミニズム」(2023年1月2日放送)などの録画を参考に上野千鶴子さんの『フェミニズムがひらいた道』(NHK出版)などを図書館より借用して理解しようと努めた。

同時進行的に、キティ『ケアの倫理からはじめる正義論——支えあう平等』(白澤社)、小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』(講談社)、ギリガンの『もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理』(風行社)なども含め参考にしたが、「翻訳調」の読後感が残った。

私はこれまでの小学校教員人生では、クラスの平等を大事に「えこひいきや差別・いじめを嫌い」教育実践を進めてきたつもりだが、もう少し振り返った見直しが必要なようだ。

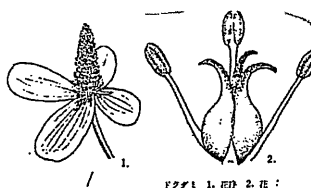
これからの残り少ない人生の中でじっくり学んで、今までの常識や当たり前としていたことの見直しで、ジェンダーやフェミニズムの本質に迫り考えを広げ、実生活に生かしたいと考えている。

(かわいやすひさ 所員)

ドクダミ

誰もが知っている植物でしょう。農道に入る前の草むらや、やや湿った日陰にはどこにでも咲いています。中学校では、夏休みの薬草採集で集めて生徒会費に当てています。

特有な匂いがありますが。十種の薬の効能があると言われ、腫れ物、便秘、高血圧などに効くそうです。名前は「毒痛み」からとも「毒を矯める」の意だとも言われています。



四枚の白い花びらのように見えるのは、実は総苞で、中央の黄色い芯のような花穂を包んでいたものです。花穂は、ごく小さい花が集まっているところですが、一つ一つの花には、図のように、花びらもぐくもありません。ただ三本のおしべと上の方が三つに分かれている子房があるだけです。

「1987年7月3日 「綱木の自然」第12号」より

(和澄)